

滑稽俳句論壇 100

滑稽俳句論壇（九十四）にて東良子氏が喝破されているように、“滑稽句は、伝統俳句からすれば邪道とされている”とのご指摘は、残念ながら現実であります。そこで、滑稽俳句を愛する者として、碩学の論も借りつつ、滑稽俳句が日本の詩歌文芸の正統に位置するものであり、決して邪道扱いされるものではないということを論じてみたいと思います。

英文学者でありユーモアの研究者でもある外山滋比古氏は、“ユーモアは作り出すものでなく、発見である。発見を言葉で表現し、新しい虚の世界を作り出すのがユーモアである”とユーモアを規定しています（『ユーモアのレッスン』）。東氏が同論壇の締めくくりで“滑稽句をつくる秘訣は滑稽を発見する眼力ではないか”と書いておられますが、実作者と学者の見解がまさに合致していると言えましょう。

名だたる万葉学者で日本詩歌にも精通する中西進氏は、その著書『亀が鳴く国—日本の風土と詩歌』で、“ウソ（虚）を快いものとして、心ゆたかに生きてきたのが日本人だった。文芸（詩歌）に於いてもウソの世界で遊ぶことは正統な行いである。そして、ウソのキーをたくさん持つのが俳句であり、虚の世界で遊ぶ文芸こそが俳句である”と述べておられます。その一例として“亀鳴く”といったあり得ない季語を詠むことを挙げています。（確かに、ミミズも鳴かないし、山も笑ったりしないでしょう。）

滑稽俳句実作者としての私の立場から、これまでのポイントを整理してみたいと思います。まず身の回りの世界（実）に遍在する滑稽、おかしみを発見することから滑稽句作りは始まります。

例えば、夏の盛りに水道の栓をひねったら、折からの節水のため水がちよろちよろとしか出ませんでした。そこで、「蛇口より夏バテの水出でにけり」を作ります。ここで上方漫才ならツッコミが入ります。“そんなアホな。なんで水が夏バテする（ウソの世界）んや？”と。俳句でも、読者が同じような反応をす

るでしょう。句会ならば、作者がここで「水の勢いがなくて、夏バテしているようにオレには感じられたんだ」と言い返すでしょう。この時点で、句会の場はどっと盛り上がり、「確かに、そう言われれば、そうかもしれんな」と笑いが起こり、全員で「ウソ（虚）の世界で楽しく遊ぶ」ことが出来ます。「水の夏バテ」という滑稽を発見し、それを五七五の俳句で表現し、虚の世界を作り出し、みなで遊ぶという、日本の詩歌の極めて正統な営みと言えるのではないのでしょうか。少なくとも、このような句が邪道扱いされるとは、外山、中西両氏とも言われなと思います。

ここで自戒をこめて注意を喚起したいのは、「滑稽は発見するものであり作り出すものではない」ということです。作り出されるべきものは、「発見した滑稽を俳句にして描かれる虚の世界」なのです。滑稽を捏造(?)すると、わざとらしくなり、スベルこと必定です。この手の滑稽句を取り上げて、伝統俳句の方々が邪道扱いされているのではないのでしょうか。この点は、我々滑稽俳句作者も常に心すべきでしょう。

最後に、ウソ（虚）の世界に徹底すべく、次の自作句で締めくくりたいと思います。

亀鳴くを聞き入る亀や甲羅干し

[つづく]